

「湖上を歩く」この物語は実に不思議な話である。水の上を歩くこと不思議さは当然だが、そのこと以前に、何故このストーリーの中でイエスが、湖上を歩く必要があったのか？ 弟子たちが舟を出し湖の真ん中に来ると、風が逆風となって漕ぎ悩んでいると記すが、特に嵐が吹いて弟子たちの舟が沈みそうになっていた訳でもない。この箇所を読み進めると、《パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである》とある。これは「五千人の 給食」のことを言っているが、その関連から読み取れることは、五つのパンと二匹の魚で五千人の人々が満腹する奇跡があって、弟子たちはその出来事に驚き、神の業に感銘を受けた。しかし、そのすぐあとに、この湖上を歩くイエスの姿を見て、「幽霊だと思い、大声で叫ぶ」弟子たちの姿を現す。そして心の鈍さが指摘される。この流れからは、「奇跡」を信じなさいということなのか？

旧約を見ると、「神と海」との関係がよく出てくる。それは、神が海を制していることを表現しているといわれる。現在でも「海」は、巨大な力、未知の世界、生きる恵みと同時に、死の恐怖も見せつけるものである。古代から現代にかけて、海を制するものは世界をも制するとされ、強大な船を造り続け、戦争に活用されてきた。第一次世界大戦で日本がロシアに勝利したのも、戦艦の力によるものと言われる。

聖書の時代でいえば、なおさら海の恐怖は相当なもの。ノアの箱舟物語、モーセのイスラエルの民を率いて海を渡る記事は、海を制する神の力の物語でもある。そのことから、イエスが湖上を歩くというマルコの表現は、海の恐怖を克服される方であるという思想、そして同時に神の力の表現がその背景としてあると考えられる。

2013年も過ぎ去る。私たちはこの年をどう漕いだのか。教会はこの世の海をどう漕いだのか。少なくとも、共に手を携えて荒波を漕いだことである。前進したのかは分かりづらく、漕ぎ悩んでいたと言ってもいい。ただ、もしこの世の荒波に身を任せて、教会が世に無関心でいるとしたら、それは舟ではなく、ただの漂流物にしかすぎない。漕ぎ悩んでもいい。それでも漕いでゆく。その時、イエス様のお姿に気づかされて、慰めと励ましを受け、勇気と希望を受けて、この世の荒波を漕がせて頂くのである。新しい年もまた、この世の荒波の中でご一緒に手を携えて、教会という舟を漕いで行きたいと願っている。(神谷)